

子どもと教材

砂 場 三 郎

教材につかわれる素材や材料の特徴や取り扱い方法について述べればよいのだと思つたら、先ずはじめに一般的なことを、との注文ですので……

子どもは素材をどのように感じとっているか、指導者はどのようなねらいでこれを与えるべきか、というようなことについて漠然とした考えをのべてみたいと思います。

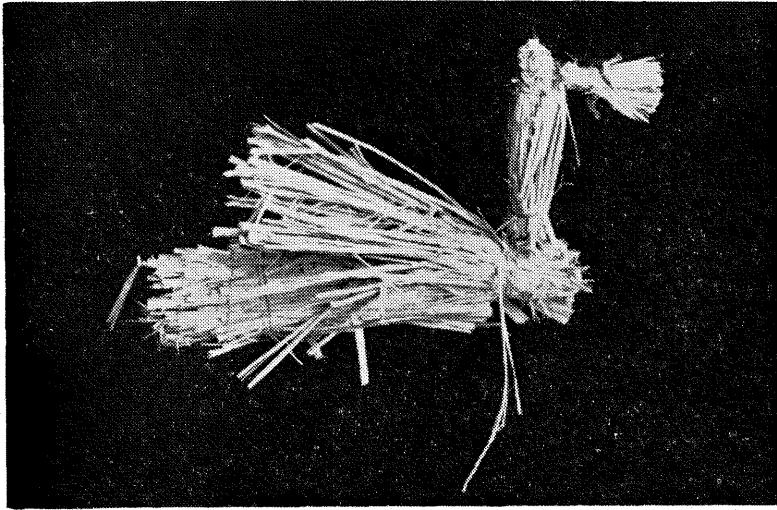
直感に依存する造形活動

幼児期の子どもの活動がよく原始期の人類の発達とひきあいに出されますが、アルタミラやレ・アイジスの洞窟画からフランス・北欧・北アフリカなどに分布する現在いわれるところの原始美術の中でうかがわれることは、いずれも原始的な道具、原始の方法で作られ、しかもそれが觀賞のためのものでなく生存

と生活の必然性から生れたものであるということと、子どもの表現や活動が生活即ち遊びの中で必然的にあらわれ発達している点の共通点を意味するもので、共に直観に依存する造形表現であるという点に意義を持っている。

次に、技術の面をとり出してみても、「人類の手の歴史」が示すように、つかむ、すくう、おさえる、にぎるなど手の働きから出発し長い時間を経過し、進化して、現在の道具・機械に発展したように子どもの発達段階の中にもこの進化の縮図のようなものを感じとることができる。

未発達な子どもに成熟したおとなの文化をそのまま与えるようなことは無駄であるといわれているが、このような面から考えても、当然なことで、教材や、素材として経験させる場合でも子どもの発達段階をよく理解して与えるべきであろう。



自己表現の媒介物（子どものがわから）

次に子どもの活動の面から眺めてみても、一片の木片が自動車や飛行機として夢中になれる姿は、それはもはや、木片でもなく模型でもない、自動車や飛行機そのもので、運転者そのものになりきれる。この心理から推してわかるように我々がいう素材や材料という考えでなく自己表現のための媒介物として扱っている場合が多い。

この二つの特徴から考えられることは、子どもが生活し発育していく上から、身のまわりのものすべてが生活に直結した素材で、子どもには子どもなりの使い方・吸収のしかたがあるということ、特に幼児期の教材はもつと広範囲にダイナミックに考えてよいのではないかと思われまます。

しかし現代の幼児教育は、幼児の発達段階にこだわりすぎてか、教材や素材の配当にあまり気をつかい過ぎていく傾向が強いのではないか。

先ず製作の教材にしても、素材の抵抗面から考え、幼稚園だから！ 保育園だから！ 紙ぐらいで、粘土ぐらいで、というように抵抗の少ない紙や粘土が主材料になりがちのように思われるが、これはおとなの持つ素材を工作するときの基礎概念から「こんな材料は子どもに無理だ、切るのがたいへんだ、折るのがたいへんだ」といって、教師自身が敬遠し、躊躇しがちで

はないでしょうか。

前にものべたように、子どもの活動は、手の活動からいろいろな事を経験していくものであるが持ちあげる、押す、引くなど体ごとぶっつけて得る経験も貴重であるので多少の抵抗があってもなるべく多種多様の経験をさせ、単なる手の経験、頭の経験で終らさないようにしたいものです。そしてこれらの活動経験から素材の特徴をつかみその材料を撰択し、更に活かせるような方向に進めるべきだと思います。

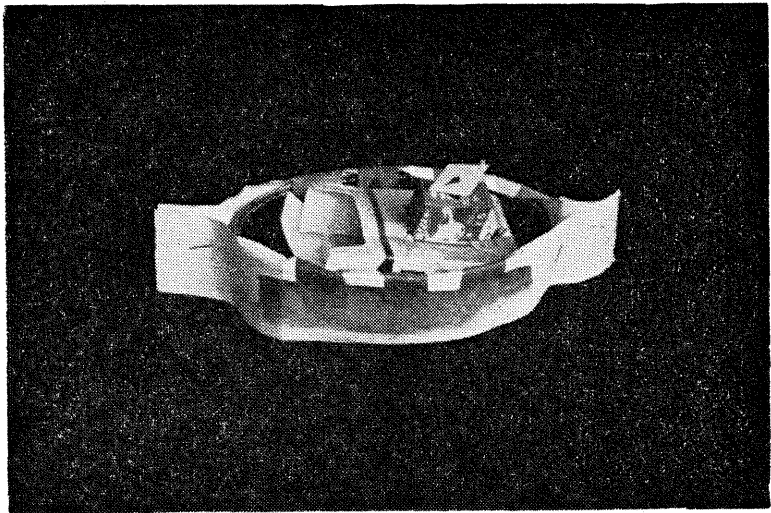
空 缶 の 船

これはおとなは概念でみ、子どもは直感でためすということをまざまざとみせつけられる例ですが……

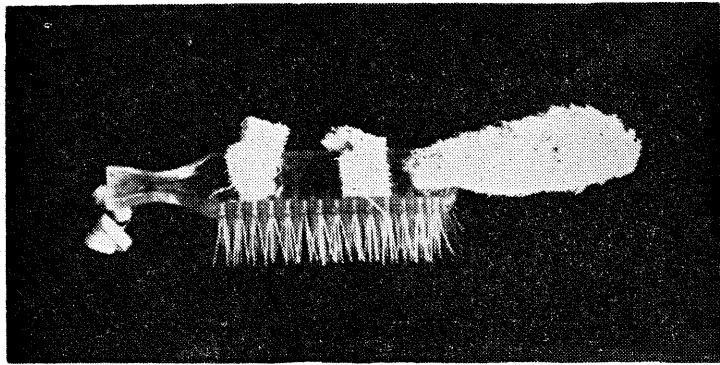
例えば空缶をつかって製作をする場合。

これらから何を学びとるか、紙箱では経験できなかった缶の強さ、水にぬらしても大丈夫、がらがら音がする、水にうかべることができる、など我々がおよそ気がつかない単純な小さな事でも子どもにはすばらしい経験になる場合が多い。空缶を金ぞくとして扱いたがるのはむしろおとなのほうである。

また空箱（ボール紙）や木の積木と同じようであるが、これらのかわりに煉瓦やコンクリートブロックを与えてみると、その活動はまた一変する。踏んでもつぶれない硬さと重量感、ぬれてもよごれても泥んこにしても大丈夫という安心感が、もはや



手や頭のはたらきを通り越してからだごとぶっつけたいきいきとした子どもらしい活動をくりひげる。そしてこの体で感じと



ったもので、素材の性質や特徴はしらずしらずのうちに子ども
の生活の中にとけこみ、または知識となり認識となって成長す
る形は、お砂ばのお城になり船になりトンネルであるがその活

動の中には、子ど
もらしき、と創造
豊かな表現力がみ
なぎっている。

材料置場のコン
クリートの敷石が
遊びの道具にな
る。材木の山がま
た、何かを教えて
くれる。

このような経験
は、直接造形活動
に関連がないよう
に思われるが、原
始生活の中の石こ
ろや粘土をいじり
動物を追いかけて
得た経験と関連づ
けることは奇弁で

もなからう。

みじかな材料を……(教師のがわから)

地域性をいかすということばがよく使われるが、日頃見聞き
しているものはどうしても新鮮さをうしない何か目新しいも
のを求め与えるという傾向があるのではないか、それが土地の
名産みやげもの屋的なものになって現れてくる。もちろんこれ
らの中にもちょっとしたヒントで思わぬ活動に発展するものも
あるが、もっと身近な日頃気付かなかった川原の石ころ、陶器
工場などある所では皿のかけら、工場街のプレスの打抜き屑な
ど一見突飛と思われるものにまで意を注ぎ、それを感じとりみ
つけ与えるようにしたいもので子どもに感じとる力を養わせる
と共に教師自身が感じる目を持ちたいものである。

素材の与え方

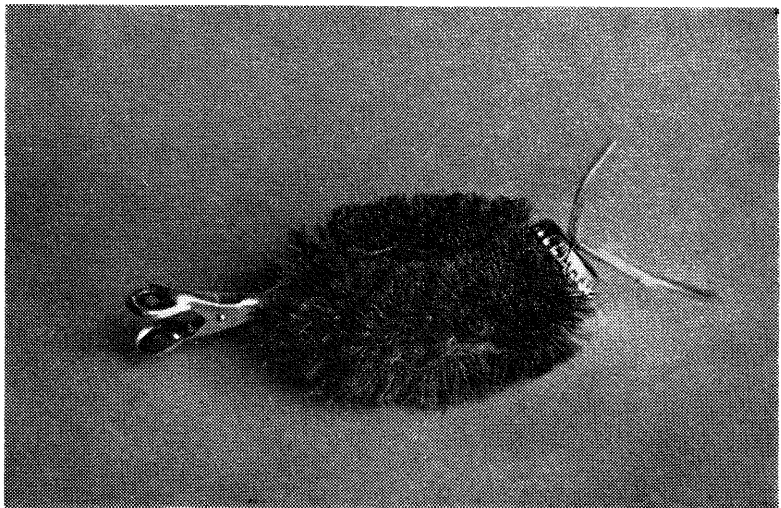
- (一) 素材の色や形からあるものを連想し想像しそれをのばすオ
ブジェ工作といわれるような与え方。
- (二) ある条件を満足させるために素材を選ばせる方法。
- (三) ある素材を教材として与え経験させてその可能性をみつけ
出す方法。

大きくわけてこの三つの方法が与えられるが、これについて
説明してみたい。

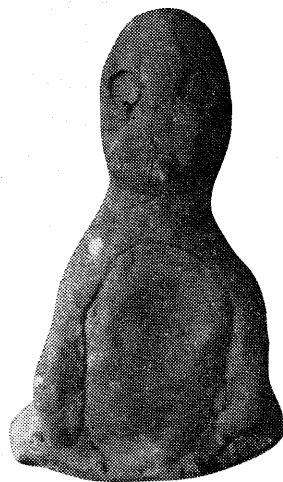
(一)普通「イメージあそび」「形さがし」といわれているが、川原の石ころから人の顔に似た石をみつけたとか、木の根っこが動物ににているということをきっかけにして、この着想や思いつきをのばし、それを発展させるために石ころに顔をかいたり動物の目をかいたりするような方法で、それが更に進んで、足もとにころがる瓦礫、机や玩具箱の隅のガラクタなどを素材にし、その中からイメージを発展させ、くっつけ組合せて作る工作でがらくた工作などといわれている活動であるが、ねらいがはっきりしないため、一部で廃物利用の工作と混同されている点もあるようだが、これはあくまで、素材からイメージを発展させるもので「あすは、お人形を作りますから、あきびんと布を持っていらっしやい」などまえて素材を指定するようなことは、この場合のねらいとはずれているといえるのではないか。

このようなねらいを持って活動させる場合は、作るものを伏せ、身近なものの中から不用品や廃物を持ちよらせ、その時になって作り方を指導するほうが効果的で、材料そのものの性質や特徴に無関係な形や色がその生命力であるので、元の形や用途にこだわるような方法は極力さけたいものである。

(二)例えば高く立てる、水にうかべる、ものを包む……など作るものの機能が要求される時、どんな材料を使ったらその条件を満足させることができるか、材料を考えさせるやり方で、



「タワーのように高く立つものを考えてみましょう」
「さあ……何で作ったらよいでしょうね」



など材料の撰択を子どもの問題としてぶつつけるような方法をとらせる。各自が素材を選びその素材をいかにに必要な技術を各自にくふうさすことは、材料に対する認識を深め素材の特徴をつかますために効果的で、紙もまるめて棒状にしてつかう、折ってアングル状にすれば線材の働きをすることを発見させたり、わりばしを接合する方法を子ども同士でみつけれ出すなど、また船をくふうさせる場合でも、「水に浮ぶ船」となるとその材料も紙ではぬれる、粘土では沈む、これが木の船、空缶の船が生れてくる……、この活動をおして得る創造の芽も大切なことで、子ども自身で問題を解決する態度を養うためにも必要なことである。

(三)一つの素材を与えてその材料経験から素材の可能性をみ出すための与え方ですが、

「ねんどで動物を作りましょう」「紙で動物を作りましょう」というように材料を指定した場合、片方は粘土の可塑性をいかし、ある程度のリアルな表現ができるが、紙ではどうしても抽象的な折り紙のような形や、平面的な表現になりやすい、このように、材料の制約の中でくふうさすことも、材料を知るためにも必要なことです。

とくに利用度の多い粘土について考えてみると、題をあたえないで自由に表現させた場合の多くの種類の中にはイスができたり東京タワーができたりするが、線材としての表現がむずかしくこれに適しないことをみをもって理解する。そして量材としてのねんどの特徴を身につけていくのであるが、子どもの発達に従ってこのような素材の把握まで留意し、可能性を知り、その限界をしり適格な材料をいかし得る能力をそだてる事、色や形によってイメージをうかばせ、あるいはその可能性をたしかめさせることなどに、指導者としてのねらいをもってコントロールし与えることが大切である。

(東京都板橋区立福荷台小学校)

×
×
×
×
×